

# 最後の文人 富岡鉄斎翁

日本最後の文人といわれる富岡鉄斎とみ おか てっ さい（1836～1924）は、京の法衣商の次男に生まれた。

89年の生涯で1万点以上の書画を残した鉄斎だが、本人は「私は画家ではない。儒者（学者）である。」と自認し、画はあくまで余技であると考えていた。

万卷の書物を読み蓄えた膨大な知識から生み出した多彩な作品について「私は意味のないものは描かない、私の絵はまず賛（絵に添えられた文章）を読んでほしい」という言葉も残している。

画業のみならず、宮司として神社仏閣の復興を務めるとともに、教員として私塾立命館や京都市美術学校などで教鞭をとるなど、多方面で活躍した。



77歳の鉄斎

提供：清荒神清澄寺 鉄斎美術館

## 富岡鉄斎 略年譜

年代	年齢	事項
天保7 (1836)	1	12月19日京都に生まれる。通称は猷輔。後、百鍊を名とする。字は無倦、号は鉄崖、鉄史、鉄斎など。
安政2 (1855)	20	大田垣蓮月と同居、作陶の手助けをする。
明治9 (1876)	41	5月奈良石上神社少宮司。12月大阪大鳥神社大宮司。
明治10 (1877)	42	2月堺行在所で天皇に拝謁。7月正七位。
明治14 (1881)	46	兄敬憲の逝去により、宮司を辞職し、帰洛。
明治15 (1882)	47	京都室町通一条薬屋町（現在地）に転居。没年まで在住。
明治21 (1888)	53	京都車折神社宮司。明治26年辞職。
明治23 (1890)	55	幸野樗嶺等と京都美術協会創立、評議員。
明治27 (1894)	59	京都市美術学校教師（修身）。
明治30 (1897)	62	田能村直入等と日本南画協会設立、商議員。
大正6 (1917)	82	6月皇室技芸員。11月京都市公会堂にて、今尾景年、竹内栖鳳、山元春挙、上村松園等と皇后の御前で揮毫。
大正7 (1918)	83	5月皇室技芸員拝命祝賀会。12月謙蔵（長男）逝去（46歳）。
大正8 (1919)	84	9月帝国美術院会員。
大正11 (1922)	87	7月正五位。同月書庫「魁星閣」、10月画室「無量寿仏堂」落成。11月画集『百東坡』出版。
大正13 (1924)	89	1月画集『米寿墨戯』出版。12月31日逝去。翌年、従四位。法名、無量寿院鉄斎居士。

※明治五年の太陽暦採用までは旧暦で記載しています。

※年齢表記は数え年。



# 旧富岡鉄斎邸のあゆみ

## 富岡鉄斎邸時代 (明治15年～大正13年)

本施設の前身となる旧邸宅は、小川流煎茶の家祖小川可進の居宅を富岡鉄斎が買い上げ、明治15(1882)年に転居。その後、隣接の画家横山華山邸宅跡の空地を購入し改装したもので、大正13(1924)年の没年まで居住していた。

## 京都府議会議員公舎時代 (昭和22年～平成24年)

文人趣味である鉄斎の総体を知りうる遺構として、文化財的な価値を有していた本施設は、その後、増改築等行い、昭和22(1947)年から平成24(2012)年まで、京都府議会議員公舎として利用されていた。

## 文化と産業の交流拠点 (令和6年～)

本施設については、文化庁京都移転支援事業並びに令和4(2022)年の京都商工会議所創立140周年記念事業の一環として、文化と産業の交流拠点として令和6(2024)年春、新たに生まれ変わった。特に、鉄斎の思想がよく表れた茶室、画室、和室については、可能な限り当時の部材等を再利用し、整備をおこなった。なお、敷地内にあった武田五一設計の鉄筋3階建てコンクリート造り書庫棟「魁星閣」は劣化が激しかったため撤去した。



室町通から臨む外観



庭園から臨む画室全景



書庫棟(魁星閣)



画室内部



茶室内部

京都府議会議員公舎時代の様子

© 京都工芸繊維大学 清水研究室